

# 西周の実用性への視座

## ——伝統思想に基づく捉え直し——

播本 崇史

### はじめに

西周（1829-1897）は、西洋思想を範として、日本の近代化を推進した人物として著名である。その学術領域は多岐に及ぶが、諸概念の理解に際しては、その多くを儒教概念をはじめとする漢語概念を基礎に据えている<sup>1</sup>。

西の著作には、かかる漢語概念をそのままに踏襲しているものもあれば、これを換骨奪胎し、そこに新たな価値付けを行っているものもある。その営為に、儒教との対峙があるということは、多くの先行研究が指摘しているところである。

しかしながら、植手通有氏が「明治啓蒙思想の形成とその脆弱性——西周と加藤弘之を中心として」（日本の名著 34『西周・加藤弘之』中央公論社、中公バックス、1984）において指摘しているように、西は、当時の基礎教養でもあった儒教、とりわけ朱子学を、必ずしも無下に貶めていたわけではない。ただし、西が如何に儒教思想を理解し、それを踏まえていたのか、といったことについては、いまだ詳らかにされていない問題があるように思われる。

そこで、小論にて着目したいのは、西自身による儒学概念の捉え直しである。伝統思想の捉え直しは、西周思想の独自性を考察してゆく上では、全く等閑にしておくわけにはいかない問題であろう。

主な先行研究には、西周思想に関する単行の専門書籍として、小泉仰『西周と欧米思想の出会い』（三峰書房、1989）、蓮沼啓介『西周に於ける哲学の成立』（神戸大学研究双書刊行会、1990）をはじめ、清水多吉『西周——兵馬の権はいずこにありや——』（ミネルヴァ出版、2010）、松島弘『近代日本哲学の祖・西周——生涯と思想』（文藝春秋企画出版部、2014）等がある。また、小論では特に、西周を主題に掲げる論文として、井上厚史氏と小路口聡氏による次の論考に示唆を受けている。井上氏の「西周と儒教思想—「理」の解釈をめぐる—」（島根県立大学西周研究会編『西周と日本の近代』ペリカン社、2005）では、東アジアの精神史上において、宋学以降、極めて重要視されてきた「理」に対する西周の理解について論究される。井上氏は、『西周と日本の近代』自体が提示している炯眼のままだに、思想の近代化に際し、明治初期の知識人たちが「儒教とともにあった」<sup>2</sup>というその史実態を明らかにしている。また、儒教批判の営みに「近代化」の萌芽があるのではなく、むしろ儒教そのもののうちに見られた近代儒教への「変貌」といった一面を明らかにしている点で、従前の西周研究からして出色のものである。また小路口氏も「西周と陽明学—「生性割記」における「当下便是」説批判をめぐる—」（吉田公平・岩井昌悟・小坂国継編、東洋大学国際哲学研究センター第一ユニット著『近代化と伝統の間—明治期の人間観と世界観』教育評論社、2016）において、陽明学に関する西周自身の言説から、良心論として展開されたその人間観の一端を明らかにされている。当該論文は、

西自身が批判的に乗り越えようとした儒教的人間観を浮き彫りにしたうえで、近代啓蒙という思想趨勢の痕跡を明らかにしており、極めて示唆に富む。

儒教は当時、いわば思想的土壌であったが、西自身がこれを完全に捨て去るべきものとしていたわけではない。小論では、先行研究の成果を踏まえつつ、「近代化」のなかで新たな価値を創出しようとした彼の営みやその思想的内実について、これまで指摘されてこなかった観点を補いつつ若干の考察を試みたい。

## Ⅰ.西周の学・術・文章観—「洋字ヲ以テ國語ヲ書スルノ論」から—

『明六雑誌』創刊第一号の巻頭に、「洋字ヲ以テ國語ヲ書スルノ論」と題する西周の論文がある。『西周全集』では第二巻所載。国語を洋字によって書き表すべきとすることから、「過激な論」として紹介されることもある<sup>3</sup>。

該書は、洋字を一般化することの意義のみならず、その方途や課題にまで具体的に説き及んでいる。この後の経緯をたどれば、洋字によって国語を書き表すといった西周の目論見は実現しなかったが、該書からは西自身の哲学思想を窺うことができると言える。また、翻訳家としても名高い西周が、思想・哲学の基本となる「言語」を、如何に理解していたのであろうか。小論ではまずかかる問題について明らかにしつつ、西周思想の特徴を浮き彫りにしておきたい。

なお、該書を扱う先行研究には、西周の原文を引用していないものが目立つ。そこで小論では、できるだけ、西自身の著述に基づき、考察を試みることにしたい。これにより諸先生方から御批正賜れば幸いである。

### （１）西周の文章観

ソレ所謂學ナリ術ナリ文章ナリハ皆カノ愚暗ヲ破リ一大艱險ヲ除クノ具ナレハ、僕謂フ苟モ人民私ニ世道上ニ就テカノ愚暗ノ大軍ヲ敗ラント欲スレハ之ヲ置テ他路ナカルヘシ。是僕輩驚材譎劣ナルモ敢テカヲ陳テ列ニ就カンヲ願フ所ナリ（『西周全集』第二巻、570頁。本章では、以下頁のみ記す）

西周にとって、「学・術・文章」は、「賢知ノ寡ク愚不肖ノ衆クシテ其ノ勢衆寡敵セサルナリ、是前ニ所謂人民ノ愚如何トモスルナキ者ナリ」（570頁）という実情に対し、これを打破する手段として位置づけられている。

「文章」は、古くは『論語』公冶長に見られる。明治期知識人の基礎教養とも言える朱熹『論語集注』には、「徳が外部に顕れたもののことで、威儀・文辞などいずれもこれである」<sup>4</sup>とある。つまり「文章」とは、いわゆる「文辞」を意味するだけでなく、「威儀」ともあるように、その全人格的内面の顕れをも意味している語と言うことになる。

世人の愚暗を破る手段とされる「学・術・文章」だが、次に見るように、特に「文章」は、学術を成立せしめる基礎として位置づけられている。まさに、かかる「文」は韓愈の「文者貫道之器也」の通り、道理を貫いている器としての理解がある。

今姑社ノ題號タル學術文章ノ三義ニ就テ之ヲ論スルニ、所謂學ナリ術ナリハ文章有テ始メテ立

ツヘシ。苟モ文章ナシ何ヲカ學トシ何ヲカ術トセン。文ハ貫道ノ器ナリト古人亦之ヲ言ヘリ。然ルニ今其所謂我ノ文章ナル者言フ所書スル所其法ヲ異ニシテ言フヘキハ書スヘカラス、書スヘキハ言フヘカラス、是亦文章中ノ愚ナル者ニシテ文章中ノ一大艱險ナリ。蓋世ノ人既ニ爰ニ見ルアリ。故ニ今日之ヲ改正セムトスルノ舉亦ナキニアラス。(570-571 頁)

「文章」には、書かれる内容と、話される内容とがある。ただ、言文は、必ずしも一致するものとは限らず、邦語でのその相異は顕著である。そこで種々の国語論が説かれることとなる。それを西は「漢字ノ数ヲ減シ其數ヲ定ム、曰ク和字ノミヲ用ヒ和字書ヲ製シ和文典ヲ作ル」(571 頁)と紹介するが、自身はこれには与さない<sup>5</sup>。直後に記されている「和字」にルビを付し「カナ」と読ませ、邦語は子音と母音との組み合わせによって成立するため、カナのみでの表記となれば「其不便焉ヨリ大ナルハナシ」(571 頁)と言うのである。

## (2) 洋字活用と日本観

西の対案は、文字修得の最初から、洋文字を取り入れることであった。すでに欧化主義という時代的趨勢の最中にあり、衣服、飲食、居住、法律、政事、風俗その他百工學術に至るまで、欧州に採らざるものはなくなっていた。「永久二期スレハ雜居必ス行レサルヲ得ス、洋教必ス入ラサルヲ得ス」(571 頁)。文字もまた欧州文化との雜居があつて然るべきと言うのである。

ただし、西は、当の日本人の性質と、言語自体のもつ特性とを分析することで、「天性ノ言語ヲ廢シ他ノ言語ヲ用ヒント欲スルノ弊」(572 頁)のあることを指摘する。

西は、日本人の性質として、「我國ノ如キ之ヲ從來ノ經歷ニ徴シ之ヲ國民ノ性質ニ質スニ、襲蹈ニ長シ模倣ニ巧ニシテ自ラ機軸ヲ出スニ短ナリ」(571-572 頁)と分析している。さらに、文学の一事を例に挙げ、日本では、中古は白居易を貴び、〔林〕羅山や〔山崎〕闇齋等は宋学を宗とし、中江〔藤樹〕や熊沢〔蕃山〕等は陽明学を源とし、護園〔荻生徂徠〕は王〔世貞〕や李〔攀竜〕に根ざし、時代が降れば袁〔宏道〕や鍾〔惺〕を踏襲しているに過ぎず、いまだかつて一人も新機軸を打ち出した者はいないとして日本思想史上における史実を整理する。その上で西は、日本人の審美眼とも言え得る特性をこそ、「善ヲ見テ遷リ長ヲ取テ用フ亦美德ナリ」(572 頁)として、積極的に評価するのである。

また、言語自体の特性として、「人民ノ言語天性ニ本ツク、風土寒熱人種ノ源由相合シテ生ス必變スヘカラス」(572 頁)と論じる。かつて邦語の成立において、漢土より文字を学び呉音・漢音・唐音を受容してきたものの、漢語が常用されていたのは一部の知識階層、「王朝ノ古官府」のみであったために一般化することがなく、漢土とは風土の異なる世相にあつては、漢語諸音が有していた真意を忘失し、遂には候文をはじめ、「奉る」「致す」「為」「如し」等、日本独自の用法がなされるようになったと述べる。

つまり、西によれば、言語は、その土着化によって、当地独自の意味・価値が新たに加えられ、その外来語本来とは異なる概念を指し示すようになってしまうことがあると言うのである。これが、天性の言語を廢して他の言語を用いようとする際に生じてくる弊害である。

## (3) 洋字活用とその利便性

実は洋字を用いるべきとする西周の考えは、国学・漢字の撤廃のためなどではなく、カナ(和語)

を洋字にて記すというものである。

洋字ヲ以テ和語ヲ書シ呼法ヲ立テ以テ之ヲ讀ム。如此耳。然ルニ而テ其事タル嚴令シテ行ハルヘキニアラス。禁罰シテ習ハシムヘキニアラス。習フニ漸次ヲ以テシ行フニ歲月ヲ以テシ、寡ヨリ衆ニ及ホシ小ヨリ大ニ至ラシム。同志、社ヲ結ヒ同好相投スルニアラサレハ能ハス。是其以テ社ヲ結フノ要ナル所ニシテ、又諸先生ノ名望ヲ假ルニアラサレハ成スヘカラサル所ナリ。曰ク利十ナラサレハ事ヲ變セス、害百ナラサレハ法ヲ更メスト。(572—573 頁)

端的に言えば、西は、洋字による言文一致を目指していたことが分かる。つまり、西は、西洋諸言語に通底し、且つ西洋における「文章」文化の紐帯を、表音文字に見ていたということである。ただし、西は言文一致ということ自体において、極めて慎重な態度をも示しており、早急な制度化を図ろうとするものではなかったと言える。

これに次いで西は、その制度化における利害得失と制度施行に関わる難事を列挙する。本節次節では、まず利害得失についてまとめる。まず利については、以下のようにある。

利①語学が成立する。利②初学者の外国語の習得における利便性が高まる。利③言文一致。利④たった 26 文字によって言文一致がなされるため、老若男女、鄙夫君子の誰もが、自らの意見を書けるようになる。利⑤すでに洋算法が行われているが、これと同時に洋字が横行している。洋字の利便性が窺われる。大蔵省や陸軍省ではすでにブウクキーピング（簿記）が実施されているが、やはり洋字が用いられ、横書きである。利⑥ J.C.ヘボンの字書（『和英五林集成』）、レオン・ド・ロニーの日本語会（『日本語会話集』？）が出版されるも、現今の俗用（口語）の項目については要領を得ていない。しかし洋字の活用が広まれば、これらも適切になる。利⑦著述翻訳に極めて有用。利⑧印刷が簡便になる。欧州にて印刷術が発展した際にはそのままに活用することができる。利⑨これまで邦訳されてきた学術用語を、まるで自国の言葉であるかのように原音のまま用いることができるようになる。機械や名物についても同様である。利⑩欧州のあらゆる事を我がものとして捉えることができるようになる。自国の文字を廃し他国の長所をものにする。このことは、取るに足らない服飾改変の比ではないので、これによって我が国人民の性質である「流れるように善に従うことができる美德（傍点筆者）」を世界に誇り、〔侮られることなく〕彼らの肝を冷やすに足る。

#### （４）洋字活用における害とその目的及び「国語」観

一方、害については、以下のようなものである。害①筆墨業が仕事を失い、害②紙の製造を改めざるを得なくなり、害③漢学者流・国学者流から厭われ嫉まれる。以上の三点である。しかし、洋字が行われれば、かかる害も、害ではなくなるという。

もっとも、害①については、筆墨業は三都その他、僅かな数しか存在しておらず、洋字化も徐々に行われていく話であるので、その間に生業を転じるゆとりもあり、もとより害として顧みる必要は無いと断じる。

また、害②については、過日すでに洋紙製造所が建設され、漸次全国に立てられることになる。和紙の数は極めて多いので、〔和紙の製造がなくなり〕障子がガラスともなれば、世界の役にも立つ。まさに害転じて利となると言う。

害③については、国学の見地からすれば、洋字を用いることによって国語の学がはじめて成立す



ることになり、これは悦ぶべき事であり憎む理由にはならないと言う。さらに西は、「況や我ヨリ漢ト洋トヲ視ル素ヨリ差別ナシ、而テ洋字ハ音語ニシテ漢字ノ畫字タル我ト相反スルカ如キニアラサルヲヤ。故ニ彼レ眞ニ其利便ヲ知ラハ眞ニ服スヘキナリ」(574頁)と述べる。日本からすれば、外国語である漢・洋に差別はないが、そもそも洋字は、表音文字であるため、点画文字である漢字のように、和語(カナ)に反するものではない。国学者たちもその利便性を真に把握すれば洋字を受け入れることができるという。また我が国における漢学は、洋学におけるラテン語のようなもので、児童はまず国語を学び、次いで漢語に従事することになるので、漢語は中学以上の科となる。したがって漢学者は中学以上の教師として、まるでラテン語やギリシャ語の学師のような地位となる。学の等級としては上位となるわけで、思うべきことにはならない。ただ従来漢語に携わってきた村学窮、手習い師匠、俗吏、里胥などにとっては悦べないこともあろうが、漸次行われていくことになるので、卒然の患いはないはずであると、西は述べる。

漢語は、欧州におけるラテン語のように、学問上欠くべからざる地位にあるとするが、まず表音文字である洋字によって国語を身につけ、次いで漢語をはじめとする諸語に入るべきとしている。同様の見解は、次の如く、利②にも示されていた。「童蒙ノ初學先ッ國語ニ通シ既ニ一般事物ノ名ト理トニ通シ次ニ各國ノ語ニ入ルヲ得、且同シ洋字ナレハ彼ヲ見ル既ニ國語ニ於テ之ニ通スレハ他語ハ唯記性ヲ勞スル耳」(573頁)。洋字は、国語に通じる手段として利便を図ることができ、それ故に、まさに用いられるべきであるとする。またそうであればこそ、洋字によって各国ノ語に通じることすら簡便になるのである。

西の「洋字ヲ以テ國語ヲ書スルノ論」は、洋字によって日本語独自の音を書すべしとする論であったと言える。さらに言えば、初等教育においてカナを廃し、洋字を表音文字の基礎とすることであった。このことによって、「国語」を、欧州各国語に比肩する言語として位置づけようとしていた、と言うことができるであろう。この西の考えを敷衍すれば、「国語」における「和語(カナ)」の価値は相対的に低くなり、漢語がそうであるように、和語も、中等教育以上の段階において教授される言語となり得るであろう。すなわち、独自性の高い「日本語」が、欧州各国語や漢語と同様のレベルに置かれ、教授されることになる、といった推測が成り立つ。

ともかくも、西によれば、いずれも害は害に非ず。洋字活用によって、利へと転じる。洋字活用の利便性とは、直接には前段の十条に及ぶ利点のことになるが、それらは究極、冒頭に述べられていた「愚暗ヲ破リ一大艱險ヲ除ク具」としての利便性ということになるであろう。西は、初等教育において、洋字に基づき、人々に言文を一致させる術を身につけさせ、これによって、誰もが、自らの思想を書き表すことのできる社会の実現を目指していたのである。

## (5) 実用性への視座

西思想の興味深いところは、次いで洋字施行に際する三つの具体的な問題とその解決法に説き及んでいることである。ただし、小論では、紙幅の都合もあり、西周による見解の骨子のみを確認するにとどめる。

西が考える洋字化法施行に伴う阻碍要因とは次の三点である。①語学ノ難事、②政事上ノ難事、③費用ノ難事。すなわち、直面する具体的な現実であると言えよう。ただし、いずれも西自身は樂觀視している。

①語学における難事とは、和語、古文法(国学)、候文、漢語法といった、文体の相異である。し

かし、西は、これを「講和」せしむる術として、洋字による綴字（スペルリング）の法と呼法（フロナンシェシウン）の法とを俗言によって確立させようとする。一方で文語や敬語について、「講和」のなり得ないものもあると指摘した上で、使用頻度の問題から、俗言、すなわち意味をとらえてそのまま文字化できる程度の言葉について勉強してゆけば、百年後には欧州のような言文一致に近づくと言う。

②政事における難事とは、文部省がこれを認めるか否かといった問題である。天子でなければ「文」を考えることのなかった時代、西周は洋字の制度化によって、一人ひとりが俗言によってその精神世界を文字化できるべきであるとする理想を掲げたわけだが、文部省から禁じられれば徒労に終わる。ただし、維新後の公卿・大臣たちは誰もが変化をねがう人々であるので、彼らに道理を説き、彼らが国家に利はあれど害なきことを察すれば認めてくれるだろうと述べ、政治家たちに西は期待感を覗かせている。

③費用における難事とは、書記への給金、印刷費用、字書・文典の出版にかかる費用である。これについて西周は、明六社の本員に対し、入社時に3円を醵金するよう取り決め、その人数を増やしていくことによって解決できると謳う。さらにはこの方途により、3年の間で、国内2～3万人の社友を得られ、3万人として9万円の積立が可能となると言う。西周は「天下ノ人材ヲ一社ノ中ニ網羅スル」（577頁）ことを考えていたようである<sup>6</sup>。加えて西は、西洋文明に関心をもち、洋風に向かう有志の徒であれば、漢学者、国学者、俗人を問わず、誰でも、入社 の機会を設けようとしている。西周の構想では、かかる方法がうまく運べば、「サイエンスナリ、アーツナリ、リテラチュアナリ、モラルナリ、大畧一致セサルコトナウシテ、彼ノ愚暗ノ頑軍爰ニ於テヤ始テ殲滅遺類ナキヲ得テ、我文明ノ凱歌ヲ奏スルニ至ラン」（577頁）こととなる。

最後に、西は、実務者たちが、西方の中華文明や欧州文明に見られる奉仕精神を抱き続けなければならないということに懸念を表明している。自身の構想そのものの根本的な難事を自ら開陳するのである。すなわち、西は、いわば会費制による社の運営を構想しているため、社中事業に服務する者たちにとって、私利においては損ありて益なきことだと述べる。「其志唯専ラ天下民生ノ爲ニシテ所謂天下ノ憂ニ先チテ憂ヘ天下ノ樂ニ後レテ樂シムノ」タレハ、其初頭ハ勿論初中後トモ多少喜フヘカラサルノ事厭倦スヘキ事等生センハ必定ナリ」（578頁）。そこで、「諸先生ノ奮發負擔勉強耐忍ノ四字義上ニ止ルベク」（578頁）として、西は、実務者たちに、理想実践者たることを求めるのである。

西は、自らの理想を、宋儒范仲淹にいわゆる「先憂後楽」にも擬えているが、「にわかに見れば、軽率にも、時流にのって西方の道をとって天下を導く者のようであり、あるいは落ち着いてこのことを見れば、迂闊にも、いつの時代であっても、人情にかけ離れた行いである」と、やや自嘲気味な自己評価をも下している。ただし、西洋文明は、表音文字「アベセ26字」が基礎にあり、これに端を発して、かの文明の発展があった以上、「諸先生、僕カ論ニ万一同意シ玉ハントナラハ先アノ字ヨリ始ムヘシ」として、西は自らの情熱への同調を呼びかけている。

以上見てきたように、西は、自らの理想を極めて具体的な想定に落とし込んで再検証しており、そこに再度自身の評価を加えている。その上で、なお西洋社会を範にとり、文明発展の基礎として表音文字が位置付けられると断案し、これを積極的に論じていくのである。ここにおいて、まさに、実用性においてこそ、その是非当否を判断せんとする西周思想を如実に窺い知ることができると言

える。

西の立場は国語論においても徹底していると言いうことができるであろう。

## II 人間性における現実態への視座——儒教批判の一観点——

西は、宋学の基礎のうえに、徂徠学の影響を受け、脱藩後には洋学を修め、欧州留学を果たし、帰国後は、西洋文明社会の基礎たる学問領域に則して、翻訳・論究を重ねている。

公刊された西の主な単行訳書には『萬國公法』（慶応 4 年。西が受講した S. Visseering の国際公法講義の翻訳）、『心理學』（上・下巻、明治 8・9 年。またこの改訂版が『奚氏心理學』として明治 11 年に公刊される。J. Haven の *Mental Philosophy: including the intellect, sensibilities, and will.* の翻訳）、『利學』（明治 15 年。J. S. Mill の *Utilitarianism* の翻訳）等があり、単行著書には『百一新論』（明治 7 年。「哲学」二字の初出文献。「教」の方法論について。諸学一致の論。統一科学）、『致知啓蒙』（明治 7 年。本邦初の形式論理学の解説書）、『兵家德行』（明治 11 年。陸軍将校に対する講演の記録）等がある<sup>7</sup>。

西自身の最終的な人間観については、その晩年まで改稿を続けていたとされる『生性割記』によって窺い知ることができる<sup>8</sup>。西はその人間観を「智・情・意」によって分類する。

小泉氏の論考<sup>9</sup>によれば、西の「情主位」の人間観は、『生性發蘊』（明治 4-6 年頃執筆。未完の稿本。G. H. Lewes の *A Biographical History of Philosophy*, The Library Edition, 1857 の一部と、Comte's *Philosophy of Science: being an exposition of the Principles of the Cours de philosophie positive of Auguste Comte*, 1853 の一部の翻訳）によって示され、「智主位」は『知説』（明治 7 年。『明六雑誌』14、17、22、25 所収）によって、「意主位」は『生性割記』（明治 17 年）によって示される。また、『生性發蘊』と『知説』の執筆が、『心理學』の訳出と重なる時期もあることから、如上の人間観に関する問題設定については、ヘブンの影響を受けていたともされる。もっとも、これが翻訳のための下準備として同時並行的に行った彼なりの学びの成果なのか、翻訳作業に伴い生じてきた彼独自の人間観を新たに論じたものなのか、『心理學』の補いとして著そうとしたものなのか、今のところでは断言することができない。

ただ、小泉氏は、西が理解したヘブンの論説と、西自身による諸論著とに、見解の相違のあることを指摘している。西は、翻訳作業等を通して西洋学術を理解した上で、これを独自に再論しているのである。

もっとも、西周が智・情・意のそれぞれを伝統的概念と如何に関連させ、捉え直そうとしていたかといったことについては、まだなお論究の余地があるように思える<sup>10</sup>。そこでここでは、前章の考察を踏まえ、それが東アジア精神史上における人間観の捉え直しとして如何なる意味があったと言えるか、若干の考察を試みたい。

前章の考察によれば、西の思想的特徴には、具体性、実用性に対する志向があった。では西は、人間観における具体性・実用性、あるいはその現実性に、如何なる理解を示すのであろうか。

人間性に対する「現実性」や「現実態」といった切り口は、「本来性」や「本来態」と併せて、儒教哲学における基本的な観点である<sup>11</sup>。実は、西は近代化に向けてかかる観点そのものを否定していたかと言えば、必ずしもそうとは言い切れないように思われる。むしろ西が、まさにかかる儒教的人間観をこそ「捉え直し」の根幹に据えていたように見受けられるのである。以下、その「捉え直し」における西周思想の大枠を明らかにしておきたい。

「哲学関係断片」<sup>12</sup>に、その術語理解とともに、西の人間観分析の痕跡が、次のように記されている。

六、一身の主たるものを「靈魂」という。靈魂が宿り、諸器官のはたらく場が「心」である。心の在りかが「<sup>フレイシ</sup>脳」である。その外皮を「脳蓋」という。魂が外物と交わって感受することを「智」という。魂が外物と交わって発することを「意」という。魂が外物を感受したのにまだ発していない、そのような諸作用のあり方を「情」という。したがって「情」とは、〔外物を〕知ることと〔外物に対して〕思うこととの間に経過するわずかな時間に、〔外物を〕知ることと〔外物に向けて発せられる〕意とが混在している位相である。

六、一身之主謂之靈魂、靈魂所居之室、而具諸官者、謂之心、心之所在形、謂之<sup>心</sup>腦、<sup>フレイシ</sup>其外室、謂之腦蓋、魂接外物而受之用、謂之智、魂接外物而發之用、謂之意、魂既受外物而未發、諸用、謂之情、故情也者、知意相半之時、知意相混之位也（「哲学関係断片」<sup>13</sup>）

西周哲学の詳細を見ていく上では、靈魂、心、腦、腦蓋、智、意、情等の各概念について、詳細に見てゆく必要があるが<sup>14</sup>、ここでは、諸概念における西の理解については深入りせず、その理解の仕方、位置付けの確認をしておくにとどめたい。

ここに「智・情・意」の三語が見られるが、これらはそれぞれ同じ位相に位置づけられているわけではない。端的に言えば、「智・意」はそれぞれ別個の「用」（はたらき）であるが、「情」は「智・意」というのはたらきが同時に成り立っている「心」のあり方を明示した語であると言える。

すなわち、「情」は、外物に交わった魂が、外物の情報を受容する「智」のはたらき、すなわち「知る」という作用と、外物に交わった魂が、外物に対して反応した「意」のはたらき、すなわち「思う」という作用とが、それぞれその両者として明確化されるために、両者を結びつけている位相のことであり、両者を関連させている作用のことである。

つまり、「情」とは、現実を伴う「智」によって現象し、その反応として生じた「意」を成り立たせる心的作用と言えるであろう。

『生性割記』においても、次のように示される。

思うに情というのは、性理学では、これを大綱に列ねて、心理機構の一つとしているが、実は、生理学、解剖学の二学によれば、いわゆる情という器官として別個に存在しているわけではないのである。（中略）。情は、別個の器官として発動するのではなく、大腦が〔外物に〕感じて動かされた状態であるということは明らかである。しかしながらいわゆる単純な情に至っては、前脳の活動した状態であるということに疑念の余地はない。その具体的な形をとって発現したものにおいて追求してゆけば、理解できるであろう。つまり恐懼とは、その脳が縮こまることであり、驚愕とは、その脳が震えることであり、憤怒とは、その脳が膨らむことであり、喜悅とは、その脳が弛むことであり、悲哀とは、その脳がよじれることである。

蓋情、性理學、雖以之列於其大綱、而爲一部之官司、然其實在生理解剖二學、則非別所謂情之官具而存也。（中略）。情非別有官具而發者而爲大腦受感動之狀也明矣。然而至所謂情之單純者、則爲前腦活動之狀也無疑矣。蓋徵諸其所發於形者、而可知也。故恐懼者其腦收縮也、驚愕者其腦轉動也、憤怒者其腦怒張也、喜悅者其腦伸暢也、悲哀者其腦糾急也（『生性割記』<sup>15</sup>、（中略）



は筆者)

西の理解によれば、「情」は、「脳」という心的作用の生じる「場」の状態如何によって定まる。また、脳を身体として見るならば、まさに身体的作用に連なるはたらきでもある。事実、「情は宣達の官を爲し、司出でて、其の統括する所の官、手・足・言語機関・顔容・水血諸溝の五なり」(『生性割記』<sup>16)</sup>)とある。「情」は身体作用に連動して生じ、その作用そのものが「意」を起こす契機となる。

今、私が人を罵りその顔を叩いたならば、それは私の行為であり、私の「意」で行ったものである。この罪を「情」のせいにして、これは私の「意」ではないということはできない。このことは明確なことである。しかしながら情には輔導する役割があり、主体(心君)をその「叩くという」極限にまで至らせており、情もその責任から逃れることはできない。そしてその補助輔導の兆しというものは、必ずまず目じりが見ひらく際に顕れていたのである。

今吾詈人、起而打其面、則吾爲之也、吾意爲之也、不得委罪乎情、曰、是非吾之意也、可以證矣、然情既居輔導之職、使心君至於此極者、情亦豈得辭其責乎、而其輔導翼成之兆、必先顯乎目眦決裂之際(『生性割記』<sup>17)</sup>)

西は、明らかに、「情」を身体的変化を伴って生じるものとして提示している。別の箇所にも、「今しばらくは情の単純なるはたらきについて論じる。具体的な事態に従い時々に応じて発現するそのはたらきは、その客観上には、ただその場かぎりの事態があるに過ぎない(今姑就情之單純者而論之、是從事應時而發顯者、其客觀上唯有一場之事爲耳)」(『生性割記』<sup>18)</sup>)とあるが、やはり西は、「情」を、個別具体的事象に応じて、客観的にも確認し得る一過性の身体的変化を伴って生じる心的作用として理解していることが分かる。

かかる理解は、西による「情」観の基本であるように思われる。

ただし、「情」は客観的に捉え直され得るものではあるが、その人物の主体性そのものではない。自らの原動主体は、あくまでも「意」であり、「情」は、「智」に基づく外界認識を受けて作用し、それによって「意」の確立を促しているに過ぎない<sup>19)</sup>。このことは一応踏まえておく必要がある。

西は伝統的「情」観として、『中庸』の「喜怒哀楽」、『礼記』礼運篇の「喜怒哀懼愛惡欲」、医書の「喜怒憂思悲恐驚」などを批判的に取りあげている<sup>20)</sup>。これら諸著においては、西が言うように、「情」におけるその身体性への視座は希薄であったと言える。

例えば、『中庸』の原典には、「喜怒哀楽の未だ發せざる、之を「中」と謂う。發して皆な節に中る、之を「和」と謂う。「中」なる者は、天下の「大本」なり。「和」なる者は、天下の「達道」なり。「中」「和」を致し、天地焉に位し、萬物焉に育まる」とあるように、身体的変化を伴う概念としての規定は全くなされていない。

そればかりか、朱熹『中庸章句』に至っては、むしろ、この「情」を、次のように本性論中に位置づけているのである。

「喜怒哀楽」とは、情のことである。「未だ發せざる」とは、性のことである。喜怒哀楽のいずれにも偏らないので、これを「中」という。「發して皆な節に中る」とは、情が正常に発動する

ことである。各情それぞれがとり乱れることなく適切にはたらくので、これを「和」という。「大本」とは、天命として人に賦与されている性のことであり、天下の理は、全てここから生じている。道の体（すがた）である。「達道」とは、性のままにあることを言う。いつ如何なる時でもいつ如何なる場所でも必ずこの道に基づいて行われる。道の用（はたらき）である。この箇所では性と情という徳（人の持ち前）が説かれており、道がそれらから決して離れることなく常に在り続けているということを明らかにしている。

喜・怒・哀・樂、情也。其未發、則性也。無所偏倚。故謂之中。發皆中節、情之正也。無所乖戾。故謂之和。大本者、天命之性。天下之理皆由此出。道之體也。達道者、循性之謂。天下古今之所共由、道之用也。此言性情之德、以明道不可離之意。（『中庸章句』<sup>21）</sup>

朱子学では、『中庸』本文に示されていた「中」「和」「大本」「達道」を、心性における「性」「情」の位相において理解し、これを「道」の「体」「用」という観点として整理し位置づけている。伝統的理解としての「情」は、「道」の分析のなかに位置づけられる概念であったということができよう。したがって、「情」は、従来具体的に表出される身体的変化とともに論じられてはいなかったと言える。

西は「今いくつかの情について検討してみると、今に至るまでその精確なる論説は出ていない（今講究情之數目、古今未見其精確）」（『生性割記』<sup>22）</sup>）と言い、その筆頭に『中庸』を挙げている。

西にとって、本体論を主とする伝統的論説は、「精確」たり得ないものであったことが窺われる。むしろ実地に確認し理解することのできる具体的な位相に着目することこそが、西にとっての課題であったとすることができるであろう。

## まとめにかえて

次に、西が、人間観に関する伝統思想を如何に理解し、評価していたかといった問題について論じなければならないが、紙幅が尽きた。論じ切れていない問題については、次なる課題としたい。

日本において、西が従来の知識人たちと根本的に異なるのは、欧州への留学経験である。16世紀、明朝に至ったキリスト教宣教師たちが、中国社会に直面し、その無神論世界における「自然」哲学に驚嘆したように、西にも、類似の体験があったことであろう。

小論の目的は、西周思想の大枠を明らかにするべく、その言語観から、その論説における力点を見出し、これを人間観において確認することにあつた。西は、人間観に関する語とそれに対応する概念を捉え直していたのみならず、本来態・現実態といった伝統的儒教的観点を踏襲しながらも、「現実態」をこそ重要視する力点の置き直しを行っていたと言える。

人間の実相、社会の実相に基づこうとする西の観点は、彼の訳したルイスの著作によって知り得たコントの実証哲学の系譜にも連なるものと言えるであろう。西も、西洋哲学的に論考には、従来のものとは異なる、新鮮なる驚きを感じていたのではないだろうか。

ただし、西は、これと同時に、自身の著作においては、中国哲学史の脈絡に則して論を立てている。それは、単に、思想史の流れを確認しているのみならず、そこには西独自の思想史解釈が籠められてもいる。無論、それは、西なりに、西洋哲学的知見をその評価基準に据えてのものであり、ここにおいてこそ、西周哲学の真面目を窺い知ることができると言える。しかしながら、西は、西

洋的知見を無批判的に踏襲し、東洋的伝統思想を無碍に断ち切っているわけでもない。西が、実証性に着目したその大枠は、すでに伝統思想においても問題にされていた領域だったのである。

西の「捉え直し」は、思想を現実に変現する言語に始まり、人間観の探究にまで及び、本来性への希求から、現実性への直視へと展開している。

西の人間観をより明らかにするべく、残されている本来態、現実態といった観点に基づく西の理解を整理してゆきたい。

## 註

- <sup>1</sup> 例えば deducation の訳語となった「演繹」。今回いくつかの先行研究において、西周による造語とする指摘が管見に入った。しかしながら、私見では、この語そのものは、朱熹「中庸章句序」にも、『朱子語類』巻 67 にも見られ、「造語」とは断言しかねる。石塚正英、柴田隆行監修『哲学・思想翻訳語事典』（論創社、2003）、「演繹・帰納」の項目にも、柴田氏によって「中庸章句序」とする指摘がある。もっとも、西自身、その『心理学』序文において、「大率新造二係ハル」と分類した訳語のうちに、「演繹」を挙げている（『西周全集』第一巻、9 頁）。しかしながら、この西周の言葉を厳密に理解するならば、「大率」「係ハル」といった言明がある以上、西が「演繹」を deducation の訳語として捉え直したことは間違い無いにしても、やはり「新造」した訳語そのものであると断定することは難しいように思われる。
- <sup>2</sup> 『西周と日本の近代』148 頁
- <sup>3</sup> 該書を専門に論じられているわけではないが、高坂史郎「西周の「哲学」と東アジアの学問」（『北東アジア研究』14・15、2008）154 頁等。
- <sup>4</sup> 『論語』公治長「子貢曰、夫子之文章、可得而聞也。夫子之言性與天道、不可得而聞也」。朱熹『論語集注』に「文章、徳之見乎外者、威儀・文辭皆是也。性者、人所受之天理。天道者、天理自然之本體、其實一理也。言夫子之文章、日見乎外。固學者所共聞」などとある。
- <sup>5</sup> 西周以前に見られるものとしては、前島密「漢字御廃止之儀」（慶応 2 年）、前島「国文教育之儀ニ付建議」（明治 2 年）、南部義壽「修国語論」（明治 2 年）、南部「修国語論」（明治 4 年）、南部「文字を改換するの議」（明治 5 年）、前島「学制御施行二先ダチ国字改良相成度卑見内申書」（明治 5 年）、福沢諭吉『文字の教』（明治 6 年）等がある。佐藤稔「明治の国語問題—その始発期—」（『秋田大学教育学部教育研究所報』（26）、1989）、方光鋭「明治期における国語国字問題と日本人の漢学観」（『言葉と文化』（10）、2009）等、参照。また専門とする著書としては、平井昌夫『国語国字問題の歴史』（復刻。三元社、1998。元は思潮文庫 4、昭森社、1948）がある。また、『明六雑誌』には、西周に続く論説が多数見られる。国立国語研究所 HP（<http://www.ninjal.ac.jp/database/subject/history/>）の日本語史研究資料データベースに一般公開されている写真版を参照のこと。
- <sup>6</sup> 実際のところについては、森有礼「明六社第一年回役員改選ニ付演説」（『明六雑誌』第 30 号）に記録がある。明治 7 年の刊行は 25 号、総計 10 万 5984 であり、その内、売り出し分が 8 万 127 冊あり、毎号平均が 3205 冊となる。北田耕也「「明六社」啓蒙思想について——明治社会教育思想の源流——」（『明治大学社会教育主事課程年報』1、1992）参照のこと。なお、収入についても、詳細な記載がある。1 年間の雑誌収入において、約 810 円が計上され、支出を差し引いて、1 年 604 円を貯えるに至る。なお、30 号の奥付によれば、代価は毎号不同とある。ただし、各号代価が決定しておらずとも、前金購入の割引があった。前金にて 20 冊分購入の際には 1 割引、50 冊にて 1 割半引、100 冊分で 2 割引とある。過不足分は追って調整される。明六社は、『明六雑誌』発行初年度において、西周の構想を大きく上回る成果を生み出していたことになる。西の構想はいわば「会費制」であったのに対し、現実には、雑誌の売り上げによって、資金が賄われていたことになる。
- <sup>7</sup> 大久保利謙編『西周全集』第一集、総記、7 頁以下を参照。
- <sup>8</sup> 『生性割記』については、小泉仰『「生性割記」における西周の人間性論の形成』、『西周と欧米思想との

出会い』第五章（三峰書房、1989）、小路口聡「西周と陽明学——「生性割記」における「当下便是」説批判をめぐって——」（吉田公平・岩井昌悟・小坂国継編、東洋大学国際哲学研究センター第一ユニット著『近代化と伝統の間—明治期の人間観と世界観』教育評論社、2016）参照。

- 9 小泉仰、前掲書参照。
- 10 西周による伝統思想批判に関する先行研究としては、小泉仰『『百一新論』における西周の人間性論と荻生徂徠』（『哲学』第55集、1970）、後藤愛司「西周『百一新論』における儒教批判」（『聖徳学園女子短期大学紀要』30、1998）等があるが、一部西の儒教理解に対し疑問も残る。
- 11 「現実性」「本来性」という概念については、荒木見悟『新版仏教と儒教』（研文出版、2001、原版は平楽寺出版、1963）に見られ、「現実態」「本来態」という具体的実像に則した概念としては、吉田公平『陸象山と王陽明』（研文出版、1990）に見られる。
- 12 蓮沼啓介氏は、「和帳面四十三再考」（『北東アジア研究』第14・15合併号、2008年3月）において、「哲学関係断片」の一〜七に至るまでの成立時期について、検討を加えられている。次に引用した「六」は、「明治7年5月頃より後に書かれた」（51頁）と推定されている。また、他の関連文献の成立については、同氏「靈魂一元論の成立事情」（『神戸法学年報』23、2007）がある。
- 13 『西周全集』第一巻、177頁
- 14 例えば、ここに見られる「靈魂」や「脳」等の諸語を、彼が如何に理解し、その人間観に位置づけていたかといった問題は、西の「捉え直し」を論究していく上で極めて重要な論点であり、西周哲学を象徴し得るものとも考えられる。しかしながら、小論では、その一について論じる暇がない。指摘のみとどめ今後の課題としたい。
- 15 『西周全集』第一巻、157頁。なお、同様の見解は、「心理説ノ一斑」に詳しく論じられている。また、その終わりに示されている表において、一目瞭然に整理されている。
- 16 『西周全集』第一巻、156頁
- 17 『西周全集』第一巻、156頁
- 18 『西周全集』第一巻、157頁
- 19 小泉仰前著では、西の最終的な人間観を「意主位主義」とする。
- 20 「情」については、「心理説ノ一斑」等にもより詳しく論じられている。
- 21 『朱子全書』陸、33頁
- 22 『西周全集』第一巻、157頁

キーワード：西周、漢学、近代化、国字論、儒教批判